ピーナツ、薬剤、虫刺され…
増える「アナフィラキシーショック」
命に関わる場合も

昨年末、女優の川島海荷（うみか）さんが、いつも飲んでいるプロテインでアナフィラキシーショックを起こし、救急車で運ばれたと自身の SNS で告白しました。昨春には、アーティストのひじりえまさんがアナフィラキシーショックのため 25 歳で亡くなっています。

アナフィラキシーは、アレルギー反応を引き起こす物質（アレルゲン）に対して免疫が過剰に反応し、全身性に重篤な症状を起こした状態です。病状は急速に進み、血圧が低下し呼吸困難や意識レベルの低下を来すと「アナフィラキシーショック」と呼びます。ただちに適切な医療を行わないと命に関わります。

アナフィラキシーは 0.3～5.1％の人が一生に一度は経験し（生涯有病率）、年間発生率は 10 万人あたり 50～112 件と推定されています。最近アレルギーやアナフィラキシーが増加し、とくに食物によるものが増えています。食物では木の実によるアナフィラキシーの増加が著しく、中でもピーナツアレルギーは一度発症するとなかなか治りません。

誘因でいちばん多いのが食物で、次が新型コロナウイルスで話題になったワクチンなど薬です。3 番目がハチなどによる昆虫刺傷です。薬は重篤な心肺停止がいちばん早く起き、5 分程度でショックに陥ります。しかも薬剤アナフィラキシーの 20～25％は予測不可能です。

先日、20 代の女性が全身麻酔導入時にアナフィラキシーショックを起こしました。すぐに救命処置し、一命をとりとめ後遺症もありません。予定した手術は延期で、後日、疑わしい薬をすべて替えて行いました。

■血圧降下し、意識もうろう

症状でいちばん多いのが皮膚症状で、全身の皮膚や粘膜が腫れて発赤し、全身がかゆくなります。次に多いのがくしゃみ、鼻水、呼吸困難などの呼吸器症状です。食物の場合は下痢や吐き気、腹痛、激しい嘔吐（おうと）が出ることがあります。血圧が下がってくるとぐったりし、顔や手足が青白くなり、意識がもうろうとします。

このような全身症状が複数出るとアナフィラキシーを疑います。躊躇（ちゅうちょ）せずにアドレナリンという血圧を上げ、ショックを改善する薬を投与します。アナフィラキシー既往のある人はアドレナリンの自己注射薬や点鼻薬を持っていることがあり、あればすぐに使用します。同時に救急車を呼び病院を受診します。

注意すべきはアドレナリンなどの処置で一時改善しても、6～12 時間後に再びアナフィラキシーを起こす二相性反応を大人で 2 割、子供で 1 割ほど、みます。しばらくは注意深い観察が必要です。

アレルゲンがあっても体調や状況でアナフィラキシーを発症したり、しなかったりします。たとえば、ストレスがあったり、月経前だったりすると起こしやすく、飲酒や運動、痛み止め（NSAIDs）の内服でも起こりやすくなります。典型的な例は、小麦アレルギーがある人がパンなどを食べたあと、運動すると発症する食物依存性運動誘発アナフィラキシーです。

従来、アレルゲンはできるだけ避けるように指導していました。最近では、食物アレルギーの経口免疫療法のように、ごく少量から始め段階的に増やす減感作療法も行われています。経口や舌下、あるいは注射で減感作しますが、常にリスクを伴うためアレルギーの専門医のもとで行ってください。